

# 海を越えた皇后

―神功皇后と新羅・筑紫―

吉田修作

## 序

記紀・風土記によれば、神功皇后は北部九州の逆賊を征討し、更に海を越えて新羅に出兵し、帰国後、応神天皇を生んだと記されているが、それは歴史的には虚構とされ、神功皇后のある面のモデルには斉明天皇や卑弥呼などが考えられている。つまり、神功皇后伝承には、特に六世紀から七世紀の北部九州を中心とした日本や朝鮮半島的情勢が反映されている。これが神功皇后伝承の歴史的背景であるが、その歴史をどのように虚構化したのか。その虚構化には、歴史の反転と、歴史を越えた観念化がなされたはずである。それは八世紀の朝鮮半島と日本やまととの海を越えた文化の対立と交流から生み出されたものであり、本稿では、そのことを新羅と筑紫を中心にして考えてみる。

### 一、神功皇后と新羅・筑紫

記紀によって神功皇后の出自を見てみると、その母が葛城之高額ぬか比売で、応神記によってその祖先をずっと辿る

と、アメノヒボコに至りつく。応神記に従うと、アメノヒボコは新羅の国王の子で、妻を追って難波まで来たが、入れずに但馬に至ってそこに留まり子孫を残した、その子孫の一人が神功皇后の母となったとある。勿論この話は神話的なものだが、ただ、古事記の話の流れから言えば、母方の祖先が新羅国王の出である神功皇后が、北部九州を根拠にして新羅を攻め滅ぼしたという展開となる。神話であるにせよ、この伝承は日本と朝鮮半島の交流の歴史が背景となっている。

六から七世紀の日朝間の歴史で特筆すべきは、新羅に対する任那・百済・大和朝廷という構図と、任那・百済滅亡後の新羅と大和朝廷との交流である。神功皇后伝承の生成には、この新羅との対立状況が踏まえている。六世紀において、大和朝廷が百済中心の外交を行ったのに対し、新羅は筑紫の磐井と手を結んだ。八女地方に根拠を置く磐井は、筑・火・豊の国に勢力を広げ、博多湾に面する糟屋を押さえて、新羅と交流した。その面では、磐井は当時の東アジアや朝鮮半島情勢を的確に把握し、判断していた<sup>(1)</sup>。それに対し、大和朝廷は磐井の行動を反逆と見なし、継体二十一年(五二七)に九州に軍を派遣し、翌年、磐井を征討したことが日本書紀、古事記に記されている。

継体紀二十二年十二月の条によれば、磐井の死後、その子葛子は糟屋を屯倉として朝廷に献上したという。ここにおいて博多湾に面する糟屋の地が朝廷の直轄地となったのだが、その後、宣化元年五月、那津口<sup>なつ</sup>に官家<sup>みやけ</sup>を修造せよなどの詔が発せられている。この那津は和名抄の筑前国那珂郡中島に相当し、現博多埠頭地域を指すから、朝廷直轄領が拡大していったと見なされるが、ミヤケにおける屯倉と官家との間には漢字の書き分けがあった。古典文学大系本『日本書紀』の補注によれば、前者が一般的な朝廷の直轄地であるのに対して、後者はほぼ軍事基地、或いは、朝廷への貢納国を示すという。因みに、神功皇后の侵攻後の新羅、百済を、紀では「内官家」<sup>うちつみやけ</sup>、記では「渡屯家」<sup>わたりのみやけ</sup>と記している。従って、六から七世紀の那津は、新羅へ向かう軍事基地の要素が強かったということになる。続い

て、推古天皇九年（六〇二）に來日皇子が新羅討伐に筑紫に至り来て、嶋郡（現福岡県糸島郡）まで進軍したとある。更に、齊明天皇七年（六六一）三月、新羅討伐のために、齊明天皇が那津に至ったことが記され、その時に那津を長津と改名したという。一方、万葉集ではその地を荒津と歌っている（卷一一・三二一一、三二一六、三二一七、卷一五・三六六〇、三八九一、卷一七・三八九一）。

神功皇后が九州の根拠地とした香椎、応神天皇を生んだ宇美が、ともに糟屋郡であることは偶然ではない。要するに、神功皇后による熊曾くまそ、北部九州の逆賊、新羅への征討伝承は、磐井などの討伐や新羅との対立、齊明天皇を初めとする筑紫から北部九州巡幸を踏まえ、それらを反転させて生成されたものであった。

他に、北部九州や熊曾への征討伝承としては、日本書紀に景行天皇による九州巡行の記述があり、神功皇后紀と近接した地域のこととが語られているが、神功皇后紀が最終的には新羅出兵に至るのに対して、景行紀は地域が九州に限定され、朝鮮半島には向かわないという差異も無視出来ない。景行天皇と神功皇后の北部九州巡行は、齊明天皇のそれを二つに分離して換骨奪胎したもので、特に新羅との対立状況は、神功皇后の事績のこととして集中的に語られている。それが何故なのか、今一度、神功皇后の母の系譜を見てみる。

## 二、神功皇后と大和葛城・新羅

アメノヒボコの子孫を検証すると、但馬に留まったので、タジマモロスク、タジマモリなど、但馬の地名を負った子孫が輩出するのは当然のことながら、神功皇后の母が葛城を冠されているのは異質である。周知の如く葛城は大和の地名で、その地を根拠とした氏族名でもあることは明らかであろう。神功皇后の時代で葛城氏一族としてはカツラギノソツヒコがいる。

神功皇后紀五年三月の条には次のように記されている。新羅国王は使者を大和に派遣して朝貢したが、その目的は以前大和に人質となった者を密かに救出するためであった。神功皇后は、新羅からの使者に応じるようにソツヒコを対馬に遣わしたが、新羅の使者は策を用いて新羅の人質を逃れさせた。新羅の使者に謀られたソツヒコは、その仕返しとして使者を殺戮した後、新羅を侵略し、新羅からの捕虜を葛城高宮などに住まわせたという。これは歴史的事実とまでは言い難くとも、葛城の地と新羅とのつながりが暗示されている。更にソツヒコは、神功紀、応神紀などにおいて、新羅など朝鮮半島への使者として派遣されている。因みに、孝元記ではソツヒコをタケウチノスクネの子とする伝えを記す。ソツヒコは一応歴史的人物とされるが、だからと言ってそれが記紀の記述の事実性を保証するものではない。いずれにせよ、ソツヒコは神功皇后、応神天皇代に日朝交渉の中心的人物と見なされていた。そのソツヒコの娘が仁徳皇后のイハノヒメで、その歌に「葛城高宮我ぎ家の<sup>へ</sup>辺り」とあるから、その実家が葛城の地で、イハノヒメと神功皇后は伝承的にはほとんど接点を見出し難いが、ともに「太后」と記される特異な皇后という共通項を持つ。

その他、葛城氏から出た皇后としては、葛城<sup>つぶらの</sup>大臣の娘の韓媛が雄略天皇の妃となり、清寧天皇を生むという例が見出せ、葛城氏は大和王権を支える有力氏族の一つであったことは改めて言うまでもない。

それに対して、大和葛城地域は記紀にいかん語られているか。神武即位前紀二月によれば次のようであったという。

又高尾張<sup>たかを はりむら</sup>邑<sup>つちくも</sup>に土蜘蛛<sup>ひととなり</sup>有り。其の為人、身短くして手足長く、侏儒<sup>ひまひと</sup>と相類<sup>たぐ</sup>へり。皇軍、葛の網を結ひて掩襲<sup>おそ</sup>ひ殺す。因りて号<sup>な</sup>を改め其の邑を葛城と曰ふ。

ここでは、高尾張邑にいた土蜘蛛を葛の網で殺したので、葛城と地名を改名したと地名起源の様式で語られている。右の続きには、旧名片居、亦は片立の地で、敵を打つために軍勢<sup>いは</sup>が集っていた、或いは、敵の軍勢<sup>いは</sup>が集っていた

たから、磐余いはれと名付けたという地名起源も語られている。葛城、磐余は大和朝廷の基盤となる地域であるから、このような旧地名の改名は、朝廷による土地の新たな支配を表現しているが、ただ、敵対者がいたという伝えは残存する。葛城の場合で言えば、後の雄略紀（記）に、天皇が葛城山に登った際に出現した葛城ノヒトコトヌシも、かつての敵対者の残存と見なすこともできる。それとともに、葛城山中に出現したヒトコトヌシには、神仙思想の影響も表現から窺える。

雄略紀四年二月で天皇が葛城山で獵を行っていた時に、長人に「丹谷たんこく」で出会い、その長人が葛城ノヒトコトヌシと名告ったのに対し、「言詞ことば恭しく恪つつしみて仙ひじりに逢ふが如きに有まします」と記されているが、「丹谷」「仙」は中国の神仙思想に基づく表記である。<sup>(2)</sup> 因みに、葛城の水越峠に延喜式内社葛城水分神社があり、その近隣の丹生谷という地域にかつて水銀鉾山が存在したともされるが、水銀は神仙思想に関わるものでもあった。要するに、大和葛城は、異族的「土蜘蛛」と神仙思想の交錯した一つの異界と観念されていた。

一方、「土蜘蛛」の語の大半は記紀、風土記の九州地域に集中する。その他、常陸風土記に「佐伯」と同族として「土蜘蛛」の語が見られるものの、「土蜘蛛」の用語例は、九州と大和に偏っており、地域の隔絶がありながらも、九州と大和の共通項が「土蜘蛛」出現とその退治というのは興味深い。坂本勝は、「土蜘蛛退治の説話には異郷に対する畏れと優越という両義的な心性が流れている」と指摘する。<sup>(4)</sup> その大和での「土蜘蛛」の出現は、すべて神武紀の神武大和入りの際で、その地域の一つが葛城であった。その大和葛城は、ソツヒコの事跡で前述したように、新羅からの移住民の居住地でもあったという。

（ソツヒコは）乃ち新羅に詣りて、蹈鞞津たたらつに次り、草羅城さわらのさしを抜きて還る。是の時の俘人等とりこらは、今の桑原・佐糜さび・高宮・忍海おしぬみ、凡て四邑の漢人等あやひとが始祖なり。（神功皇后紀五年三月）

右の新羅の蹈鞞津の蹈鞞は、周知の如く製鉄用具のタタラで、それを慶尚南道釜山の南の多大浦の地名に当てた

もの。次の草羅城は現慶尚南道梁山で、谷川健一は梁山の砂鉄鉸山との関わりを指摘する<sup>(5)</sup>。そして、それらの土地の捕虜を日本に連行して四邑の漢人にしたという四邑は、全て葛城の地名である。右の記事全てを含めて歴史的事実と見なすのは躊躇されるが、それらの四邑が葛城地域であることは、それらの地域が何らかの形で新羅の金属生産集団の移動先を示すだろうことは想像に難くない。

前述したように、神功皇后の出自によれば、新羅国王の王子アメノヒボコを始祖とする一族の末裔、葛城之高額比売を母とするのであるから、神功皇后は大和葛城を根拠とした葛城氏の血筋でもあった。従って、神功皇后は、血筋的に海を越えた新羅と、「土蜘蛛」の居住地で、かつ神仙郷でもあった葛城と関わっていたと伝えられていた。別に言えば、新羅、大和葛城とは、金属生産集団の居住地でかつ不可思議な異界と見なされていたと言える。

### 三、新羅のアメノヒボコと肥前のヒメコソ社周辺

ここで再度、神功皇后の母方の始祖アメノヒボコの神話を見てみる。新羅の沼の辺で賤しい女が昼寝中に日光に感精し、赤玉を生み、その赤玉を新羅国王の王子アメノヒボコが手に入れたところ、玉が麗しい乙女に変身したので、アメノヒボコはその乙女と結婚した。しかし、アメノヒボコが高慢になったので、妻が祖先の国へ行くと行って、難波まで来て留まり、比売碁曾の社に鎮座したという。一方、日本書紀垂仁天皇二年条にアメノヒボコの異伝が記されている。そこでは、ツヌガノアラシトという名でアメノヒボコと同じような話が語られ、妻が難波と豊国国前郡で比売語曾社の神となったという。このヒメコソノ社は別に肥前国風土記にも見られ、その姫社郷ひめこその記事によると次のように伝える。

山道川ちに荒ぶる神がいて道行く人を多く殺したので、その祟る理由を占い問うたところ、「筑前国宗像郡のカゼ

コによって吾が社を祀らせれば、荒ぶる心を起こすまい」ということであつたので、カゼコを探し求めて神の社を祀らせた。そこでカゼコが幡を捧<sup>かか</sup>げて祈つて「この幡は飛んでいつて神の辺りに落ちよ」言つと、その幡は飛んで行き、御原郡姫社の社と山道川の辺の田村に落ちたところから、神の居所が分かつた。その夜の夢に機織りの道具が出てきてカゼコを抑えたので、その神が織物の女神だと知つた。幡の落ちた所に社を建てて神を祀つたところ、通行人が殺されることがなくなつたという。

古事記、日本書紀の話とは全く違い、神功皇后とは直接的な関連はないが、肥前国姫社郷の媛社神社（現小郡市）と、姫古曾神社（現鳥栖市）の由来譚として語られている。小郡の媛社神社は、嘉永七年（一八五四）の額に、「磐船神社」「棚機神社」と書かれ、前者の磐船は、物部氏の始祖、ニギハヤヒの乗つたという天磐船を想起させるとも説かれる<sup>6)</sup>。又、当社の近隣にニギハヤヒの別名である天照国照彦天火明命を祀る福童神社が存在し、これもこの地域と物部氏とのつながりを示唆する。

右の肥前風土記の話は行路妨害神の類型であり、そのタタリ神を祀つた宗像のカゼコは、先代旧事本紀に水沼君等の祖とされる物部阿遲古連公<sup>あぢこ</sup>に相当するとも言われる。水沼君は有明海に面した筑紫三瀨<sup>みずま</sup>一帯を根拠にしていたが、神代紀一書に宗像三女神を祀るともされ、海を介してかなり広範囲に勢力を保つていたようで、その宗像のカゼコがタタリ神の正体を夢によって見出したのである。タタリ神の正体を夢で見るとするのは、崇神記（紀）でオホモノヌシの霊を天皇やモモソヒメが夢に見るなどの例を挙げるまでもなく、神を祀る前段階で巫者に訪れる神秘体験として語られる。右の神については、古典文学全集本の注に、この姫社の神は韓国から渡来<sup>7)</sup>の織姫神とある。これは、新羅とは限定できないが、古代にそれらの地域に朝鮮半島からの渡来人が移住し、タタリ神と化した歴史が神話的に語られたものと考えられる。右の肥前風土記の話は、朝鮮からの渡来神や渡来人が様々な技術をもたらず一方で、摩擦も起こし得るといふアンビバレンツな面を持つて示している。右の話に見られる神社の

一つ、小郡の媛社神社は、現在の名称七夕神社として豊満川の川辺に位置し、小郡市のシンボルともなっている。そして、その近隣の豊満川沿いに、神功皇后に関わる縁起を持つ隼鷹神社が存在する。昭和七年の当社の縁起は次のようなものである。

仲哀天皇崩御後、神功皇后が武内大臣に詔して天神地祇を祀らせたところ、タカミムスヒが御神託して、御姿鷹となつて松の梢に止まったので、その所に社を建て、鷹の姿で現れたことにより、隼鷹はやたか天神と称したという。

一方、昭和十九年刊行の福岡県神社誌所載の当社の伝説では若干の異同があり、仲哀天皇が熊曾征討の時に大保の仮宮で鷹が出現し、後に神功皇后によって祀られたとある。いずれにせよ、記紀、風土記などには見られないもので、他に、八幡の神が金の鷹で出現したという伝えもあるが、当社独自の神功皇后伝承である。前述の媛社神社と隼鷹神社との関連は不明だが、その二社の周辺に、神功皇后伝承に間接的に関わる式内社御勢大靈石神社がある。当社は延喜式では筑後国御原郡に記されているが、福岡県神社誌では三井郡三国村大保（現小郡市大保）とあり、その主祭神は足仲彦天皇（仲哀）で、伝説に次のようにある。

仲哀天皇の熊曾征討の際、当地に陣を張り戦つたが、天皇は流れ矢に当たり崩御された。棺は香椎に移したが、神功皇后が新羅から凱旋後、天皇の御形代の石を魂代として祀つたという。

仲哀天皇崩御は、古事記、日本書紀本文においては、神の託宣を信じなかったことによるとされているが、書紀には一に曰くとして、仲哀天皇が熊曾征討の際に賊の矢に当たつて崩御したとある。御勢大靈石神社の言われは、この書紀の一に曰くを踏まえたもので、勿論、歴史的事実の問題ではなく、伝承上のものである。これは仲哀天皇の事跡であるとともに、その周辺の神功皇后伝承の一環としても無視し得ない。又、当社は筑後御原郡と三井郡の境界近くに位置し、福岡県神社誌の引く契仲の説においても、当社の労役は当該二郡によってなされたという。更

に興味深いことには、前掲の継体紀二十二年に従えば、筑紫三井郡は、大和朝廷と磐井との交戦場所であったというのである。これから考えるならば、日本書紀の仲哀天皇崩御の一に曰くの記事や、御勢大靈石神社に伝わる仲哀天皇の熊曾征討の伝説は、磐井の乱を下敷きにしたものではないのかと思われる。因みに、後の南北朝においても当地において、大野原合戦という大規模な戦いが繰り広げられたことが太平記に記されている。御勢大靈石神社の仲哀天皇に関する伝説は、右のような様々の話の累積の結果によるものとも考えられる。

肥前風土記のヒメコソ社から、その周辺の筑後三井郡の神社に伝わる神功皇后伝承を取り上げてきたが、媛社神社はその後筑後国領内となり、近隣に三国という地名があるように、その地域は肥前・筑前・筑後三国の国境に当たっていた。筑後風土記逸文に、筑前・筑後は元一つの国であったが、その境界に行路妨害の神がいて、多くの人を殺したので、「人命<sup>いのちづくし</sup>尽の神」と言ったところから、筑紫の国名が出来たなどの地名起源説話が記されている。筑紫が筑前・筑後の二国に分離したのは、持統四年（六九〇）頃だといひ、右の話の国境が筑前御笠郡と筑後御原郡の境の基山付近とも推定されている。従って、ヒメコソ社とその周辺の神社の神功皇后伝承は、筑紫地域のものと言っても差し支えない。そして、ヒメコソの神を祀ったのが物部氏であったらしいことから、奥野正男は、ヒメコソ神を「弥生時代に朝鮮から渡来してきた青銅器の生産者集団や、これと深いつながりのあった物部系冶金集団によって祀られた」と推定する<sup>10</sup>。但し、前述したように、朝鮮からの渡来人は技術をもたらずとともに摩擦をも引き起こし、タタリ神化する面を持っていたことも考慮する必要がある。姫社の郷では、その摩擦、対立が機織技術集団との関わりで起こったと語られているということだろう。従って、ここからは、それらと金属生産集団との微妙な関わりが浮上してくる。そこで次に、改めて記紀における神功皇后神がかりの場面を検討する。

#### 四、金銀財宝の西方の国・新羅

仲哀記によると、天皇が熊曾征伐の途次、筑紫の香椎宮で神功皇后が神がかりして神の託宣が下り、西の方に金銀財宝の国がありそれを服従させようという。しかし、仲哀天皇はその神の言葉を信じずに崩御する。この西方の国は朝鮮半島の新羅を指すが、ただ、実際には博多から朝鮮は北方に位置し、西方というのは大和から見た観念世界上のことである。これは、同じ古事記上巻で、天孫ニニギノ命が降臨した時に、「此地は韓国に向ひ、笠紗の御前に真来通りて」と韓国と笠紗（鹿兒島）が向かい合っているかのように言っていることと通じており、ともに神話的観念に基づいている。その神話的観念とは、大和を拠点として、日向は天孫降臨する地、熊曾は逆賊の跋扈する地で、いずれも境界的位相を持つものに対し、朝鮮、新羅は境界の外部の異界と位置づけられていたことを示す。つまり、神功皇后の神がかりによる神霊の言葉からは、新羅が西方の金銀財宝の国という異界と観念されていることが分かる。

一方、仲哀天皇紀、神功皇后紀においても新羅を「西の財国」としているが、新羅国王の言に「東に神国有り、日本と謂ふ」とあり、日本を日の出する神の国と位置づけており、これも一種の観念世界のことである。そして、仲哀紀では神功皇后の神がかりによる神の託宣は次のようにある。

時に神有して、皇后に託りて誨へまつりて曰はく、「天皇、何ぞ熊襲の服はざることを憂へたまふ。是膺穴の空国なり。豈兵を挙げて伐つに足らむや。茲の国に愈りて宝有る国、譬へば、処女の瞭如す向つ国有り。眼炎く金・銀・彩色・多に其の国に在り。是を栲衾新羅国と謂ふ。若し能く吾を祭りたまはば、曾て刃を血らずして、其の国必自ず服ひなむ。復熊襲も服ひなむ。云々」とのたまふ。

ここではその新羅に対し、神霊の言葉で「処女の瞭如す向つ国」「栲衾新羅の国」などと表現している。「栲衾」

という枕詞を新羅に冠する表現は、出雲風土記意宇郡のヤツカ臣の国引き詞章の冒頭、万葉集卷一五・三五八七に見られる。神の託宣による神霊の言葉に歌と同様の枕詞が用いられるのは、神功皇后の神がかりの他の言葉などにも例があるが、朝鮮半島の他国、高麗や百済には枕詞を冠した表現を行っていないので、表現上において新羅は特異な国と位置付けられていたことを示す。それは西方の金銀財宝の国という言葉として表れている。六から七世紀前半に新羅と大和朝廷は敵対関係にあったわけだが、その新羅を金銀財宝の特異な国と観念するのは如何なることか。

その理由の一つは、七世紀後半に至り、実体的に新羅からの使者が金銀などを貢ぎ物としてもたらしたことが挙げられる<sup>(1)</sup>。日本書紀によれば、天武八年十月、天武十年十月、天武十四年十一月、持統二年二月に新羅の使者が来朝しているが、その際に、金、銀、銅、鉄、刀、鼎などの貴金属類や、錦、絹、皮、馬、狗、駱駝、仏像など十数種が献じられたと記されている。神功皇后に神がかりして新羅が金銀財宝の国だから服従させようとしたのは、右のような新羅からの貢ぎ物があつたことを踏まえていることには相違ないが、それに留まるならば、何故に神功皇后が神の託宣を得て海を越え、金銀財宝を略奪するという虚構が神霊の言葉として語られなければならないのか。それを考える一つの材料として、仲哀紀の異伝である播磨風土記逸文を見てみる。

それによれば、神功皇后が新羅平定するために神々に祈願した際に、ニホツヒメが国造イハサカヒメに神がかつて託宣した言葉に、「越売をとめの眉引まよびきの国、玉匣たまぐしげ賀か々益国がます、苦枕こもくらた有宝国からあるくに、白衾しらふすま新羅国」などと形容し、自らを祀るならば、新羅を平定させるとして、魔よけの赤土を出したという。

この神霊による託宣の言葉も前掲の仲哀紀に近似するが、それ以上に新羅を理想の国と表現している。それはなぜなのか。そこで、ここに登場するニホツヒメが、古典文学全集本などの注によれば、水銀の神で、赤土は水銀とというのが注目される。神功皇后はニホツヒメの助力によって新羅を平定し、帰還してその神を紀伊国管川の藤代峰

に祀った、今の和歌山県高野山町丹生津比売神社（延喜式内社）である。この話は神功皇后の新羅出兵伝承に水銀の神、或いはその神を信奉する金属生産集団が関わっていたことを示唆している。

それとともに、右の話は、ニホツヒメという水銀の神が託宣する神霊でもあったことを語っている。その面で、ニホツヒメは神功皇后記（紀）の住吉神に相当するが、金属に関わる神が託宣を行った例としては、平安朝以降に応神天皇・神功皇后伝承と結びついた八幡神が挙げられる。

一方、逆に新羅からの神の移動が語られているものもある。

田河郡鹿春郷（かほるのさと）。この郷に河ありて……直に正西を指して流下り、真漏河（まろ）に湊会（あ）へり。（中略）昔者（むかし）、新羅の国の神、自ら度り（わた）到来り（いた）てこの河原に住みき。便則（すなは）ち名（な）けて鹿春の神と曰ひき。また郷の北に峰あり。頂に沼あり。周は三十六歩計なり。黄楊（わづ）の樹生ひたり。また竜（たつ）の骨あり。第二の峰には銅また黄楊竜の骨どもあり。第三の峰には竜の骨あり。（豊前国風土記逸文）

右の記事の真漏河は現彦山川で、その河原に「新羅の国の神」が渡来して住んだので鹿春の神となったという。九州では原をハルと発音するので、カハハラ（カワラ）がカハハル（カハル）と変化したのは自然である。「新羅の神」の渡来は、その神を奉じた新羅の人々の移住を背景としている。その鹿春（香春）の峰に竜の骨（石灰）、銅が存在するということは、それら新羅からの移住者が金属生産集団であったことを暗示する。そして、右の鹿春の郷に隣接して鏡山があり、豊前風土記逸文には、神功皇后がその鏡山に登り、天神地祇に祈願して鏡を安置したことにより、鏡山と名付けられたという地名起源説話が語られている。この地は、大宰府と豊前国府（現福岡県京都郡豊津町）とを結ぶ田河道（続日本紀天平十二年十月）に相当し、大宰帥河内王の墓と伝える円墳が現存する。万葉集には河内王を鏡山に葬る時の歌（巻三・四一七九）や鏡山を詠み込んだ歌（巻三・三一一）があり、鏡山の逸文は三一一の歌の注として万葉集註釈によって記されたものである。鏡山の記事には明確には表れないが、前

掲の鹿春郷の記事を参照すれば、鏡山の鏡も新羅系渡来人に関わるものと考えられる。

右の播磨風土記逸文、豊前風土記逸文の語ることを総合すると、新羅が水銀、銅などの金銀財宝の豊富な異界と観念される素地が見出せる。水銀と言えば道教の神仙思想が想起され、神の託宣で金銀財宝の豊かな国とされた新羅への神功皇后の出兵は、神仙思想の位相も垣間見られる。万葉集や丹後風土記逸文に見られる浦島子の話が、神仙思想に裏打ちされていることは周知の通りだが、それらと同様に、神功皇后も神仙化された異界である新羅に赴き、金銀財宝という異界のものを携えて帰還する必要性があったのである。

##### 五、神功皇后と筑紫国那珂郡・怡土郡

新羅出兵の前段階に戻ると、古事記では、神功皇后が仲哀天皇の葬儀後、再度神の託宣を乞い求め、斎場であるサニハにいたタケノウチノスクネが、神がかりして神の言葉を発する皇后に問いかけ、タケウチの問いかけに応じて神がかつた皇后が答えるという場面に至る。その問答で、皇后の御腹の児が男子であること、託宣する神の名はアマテラスと住吉三神（航海安全の神）であることが判明し、神の祭り方が指示される。続いて、神功皇后の新羅出兵となり、新羅を攻めて住吉大神の荒御魂を守護神として置く。ここで住吉の神は日本を代表する神となる。日本書紀においても話の大筋は変わらないが、託宣する場面が詳細に記され、その託宣神はアマテラスの荒御魂、ワカヒルメ、コトシロヌシ、住吉三神で、その後皇后は北部九州各地を転々とし、新羅に赴いたと伝える。その守護神と化して新羅の官家みやくともされた住吉の神は、筑紫国那珂郡（現福岡市博多区）にも祭られている。

住吉の神は周知の如く、神話的には住吉三神としてイザナキの禊の際に出現したと伝えられるが、住吉の神と同時に出現したのが志賀島の安曇氏の祭るワタツミノ神だから、場所のイメージとしては北部九州が想定されている

だろう。ただ、住吉の神は筑紫に限らず、難波（大阪）、長門（山口）、老岐、対馬などに祭られている。これらは、大和から瀬戸内海を經由して朝鮮半島に赴く航路上に相当し、万葉集卷一九・四二四五にも遣唐使などの航海安全を祈る神として住吉の神が歌われている。筑紫国那珂郡に住吉の神が祭られたのも、その地が大和と朝鮮などを結ぶ航路上の要衝であるからだが、その住吉の神の託宣が神功皇后を新羅に赴かせる原動力となったと神秘的に語られる。

一方、筑紫国那珂郡は神功皇后紀で別にクローズアップされる。皇后は神の教えを知り、天神地祇を祭って西方を征討しようとした時のことである。

爰に神田を定めて佃りたまふ。時に難河の水を引き、神田を潤さむと欲し、溝を掘り迹驚岡に及びしに、大磐塞りて溝を穿つことを得ず。皇后、武内宿禰を召し、劍・鏡を捧げて神祇を禱祈ましめて、溝を通さむことを求めたまふ。則ち当時に、雷電霹靂して、その磐を蹴裂きて、水を通さしむ。故、時人、其の溝を号して

裂田溝と曰ふ。（神功皇后紀撰政前紀四月）

なぜ右の地域がこれ程までに日本書紀にクローズアップされるかと言えば、前述したように、那津が大和朝廷直轄地になっていたからに他ならない。それは宣化元年五月の記事に基づくのだが、その官家の範囲が那津という一地域に留まらず、那珂川流域の那珂郡にも及んでいたようだ。和名抄に筑前国那珂郡三宅郷の名が見え、現在福岡市南区に三宅という地名がある。<sup>12)</sup>要するに、神功皇后紀の那珂川関連の記事は、その地域が朝廷の直轄地であったことを遡及させたことによる。

那珂川町には今でも神功皇后の事績を伝える場所があり、町内山田の伏見神社で毎年七月十五日行われる岩戸神楽では、神功皇后に由来する演目「磯良」が演じられている。神楽の演目「磯良」は、神功皇后・応神天皇の中古以降の神話化の所産である八幡縁起によるものだが、古代の神功皇后伝承地の那珂郡に残存しているのは偶然では

ないだろう。そして、那珂郡とやや離れた筑前西部糸島の高祖神社たかすにおいても神楽の演目「磯良」が行われている。<sup>13</sup>高祖は旧怡土郡に属していたが、怡土郡には、記紀や万葉集で取り上げられて著名になった、神功皇后が出産を遅らせるために用いたという鎮懐石が残されている。更に、筑前国風土記逸文の怡土郡には次のような伝えが記されている。

昔仲哀天皇が熊曾征伐されようとして筑紫に行幸された時、怡土県主らの祖イトテが、榊で神祭りの準備をして出向きお迎えして榊を献上した。天皇に名を尋ねられ、イトテは次のように名告ったという。

高麗国こまの意呂山おろに天ゆ降り来し日杵ひぼこの苗裔すまなる五十跡手いとて、是なり。

右の話は仲哀天皇の事跡となっているが、当然神功皇后伝承とも連動するものと見なしてよい。ここで注目されるのは、怡土県主の祖イトテが、高麗国の意呂山に天降ったアメノヒボコの末裔と名告っていることである。記紀のアメノヒボコには見られないのだが、地名辞書によれば、高麗は新羅の誤りで、意呂山は蔚山ウルサンを指すとしている。また、谷川健一は、蔚山には古代から達川鉄山という有名な鉄山が存在したと指摘する。<sup>14</sup>これらに従えば、ここにもアメノヒボコを祖とする金属生産集団と、仲哀天皇・神功皇后伝承の接点が見出せる。そして、神功皇后紀によれば、皇后率いる軍団は怡土を経由して対馬に至り、和珥津わにつ（対馬の北端、現上対馬町鰐浦）から海を越えて新羅に渡ったという。この航路は万葉集に歌を残す遣新羅使人等の辿ったコースとほぼ重なっている。

#### 六、神功皇后の新羅出兵と万葉集の遣新羅使人等の歌

万葉集巻十五の前半に収録された天平八年（七三六）の遣新羅使人等の歌群は、記紀編纂のやや後年にはあるが、神話化された神功皇后新羅出兵をある意味で相対化する視点を提供してくれる。

遣新羅使人等一行は、筑紫においては、筑紫の館などに停泊して歌作をなしている。因みに、三六五四の「可之布江」は香椎、三六六〇の「荒津の崎」は那津に当る。その後九州北部を西行し壱岐に渡るが、そこで一行の中の雪連宅満が病死するという不幸に遭遇する。その雪宅満の墓は壱岐に現存する。一行はそういう不幸を乗り越え、対馬を経由して新羅に渡ったが、周知の如く、この前後新羅との関係は穏やかでなく、この時も新羅の待遇が礼を失し、使いの旨を受け付けなかったという。その点から言っても、神功皇后の新羅出兵は歴史を反転させた虚構であつたことは明白となる。

目的を果たせないまま帰還せざるを得なかつた遣新羅使人一行は、帰途の対馬で大使が病死、副使も病で遅れるという不幸に見舞われながら、何とか帰京するが、その帰路の歌群も往路ほどではないにせよ、万葉集に残されている。ただ、ある程度当然のことながら、使人等一行の新羅での歌作はない。中国、朝鮮に渡航した日本人が当地で歌を詠んだという歌が、万葉集の山上憶良、古今集の安倍仲麻呂などの例外を除いて、ほとんど見当たらないのは、当時、歌は日本で歌うのが原則で、彼の地では漢詩文を行うのが当然とされていたのか、或いは、外つ国での歌作は歌集に載せなかつたのかのどちらかであろう。歌作という文芸的行為と、神という宗教的観念の差異はあるものの、遣新羅使人等の彼の地での歌がないことと、神功皇后の新羅出兵で新羅に住吉の神を祭つたと伝えるのは、対照的でさえある。

再度、住吉の神について補足すると、古事記、日本書紀の神功皇后神話を基に、平安朝初期に大阪住吉大社で記された住吉神代記によると、住吉の神は神功皇后と密事をなしたとある。この記事をめぐっては、あり得ない不謹慎なこととして無視する意見もあるが、神話的には説明可能である。古事記、日本書紀においては、皇后に住吉の神が神がかって、皇后は神と一体となって神の言葉を伝えたと記されていた。これは皇后が神を祭る巫女と化したとされるが、巫女に神がかかるのは、精神的、宗教的には神の妻になることで、そのことを実態的に記したのが住

吉神代記だということになる。

記紀においては、住吉の神は、神功皇后の腹から生まれて来る子が男子で、日継御子となるとの予言を行い、継体紀、宣化紀などでは、応神は胎中天皇とも称されている。海を越えて帰還後に神功皇后が生んだ御子は、金銀財宝の豊かな異界からもたらされた新たな天皇として、住吉の神から授けられたように語られているのである。

それに対して、遣新羅使人等の歌には、行き帰りに「大伴の御津」を歌っているにもかかわらず、難波や筑紫などの住吉の神に対する祈願の歌は見出せない。

## 結

以上、海を越えた皇后として、神功皇后伝承と新羅、筑紫のつながりを幾つかの点から考察してきた。そこから、朝鮮との交流、そして対立の拠点として、また、海を媒介にした文化交流の要衝地としての筑紫が浮き彫りにされたと思われる。特に、神話伝承の背景に、古代の日朝の歴史、金属生産集団を中心とした人の交流が垣間見られたが、神功皇后伝承は、それらを神仙思想と連動させ、新羅を異界と見なし、神がかりによる神の託宣などという設定を用いて、歴史を観念化、虚構化した。そして、平安朝以降、神功皇后伝承は、八幡信仰と結びついて新たな生成を遂げるのであるが、八幡信仰の基盤を築いたのは、朝鮮系の銅などの金属生産集団とそれらの持ち斎く神の観念であったと言われている。<sup>15)</sup> 北部九州と朝鮮半島との海を越えた交流によって、神功皇后伝承や八幡信仰が生成されていったことは間違あるまい。

注

- (1) 磐井の乱が朝鮮半島情勢と関わっていることについては、田村圓澄・小田富士雄・山尾幸久『磐井の乱』（大和書房 一九九八）が詳しい。
- (2) ヒトコトヌシの話が神仙思想に基づくことは、既に下出積興『神仙思想』（吉川弘文館 昭和四三 二七〇―四一ページ）などが指摘している。
- (3) 葛城などの地に水銀鉞山が存在したとの指摘は、松田寿男『丹生の研究』（早稲田大学出版部 昭和四五 一二―一四ページ）にある。
- (4) 坂本勝「土蜘蛛」（『古代文学講座6―人々のざわめき』勉誠社 平成六〇）。
- (5) 谷川健一『青銅の神の足跡』（三一書房 一九八五 一六〇―一六一ページ）。
- (6) 小郡の媛社神社については、『小郡市史 第一巻 通史編 原始・古代編』（ぎょうせい 平成八 六八七―六九五、七二二―四、九六九―九七一ページ）に詳しい。
- (7) 上田正昭は、これらの肥前風土記の媛社神社の伝承などから、渡来系の神がタタリ神となって在地の人が鎮祭し祭祀する場合があることを説いている（『古代の道教と朝鮮文化』人文書院 一九八九 一八八―一九一ページ）。
- (8) 『小郡市史 第六巻 資料編』（平成一四 六七四ページ）による。
- (9) 『福岡県神社誌』（昭和六三）。以下の同書の引用、内容紹介はこれに従う。
- (10) 谷川健一編『日本の神々―神社と聖地1 九州』（一九八四 白水社）の「媛社神社」の項。
- (11) 長 洋一「新羅と博多」（朝日新聞福岡総局編『古代の都市・博多』一九八九 葦書房）。
- (12) 柳沢一男「那津から博多へ」（注11と同書）に、那津官家みやけが南区三宅に限らず、その周辺はかなり広い範囲で、その範囲をどこに設定するかの幾つかの説が紹介されている。
- (13) 那珂川町の岩戸神楽、糸島の高祖神楽に関しては、演目「磯良」を含めて旧稿で取り上げた。吉田「福岡の祭りに見られる恵比須神と磯良神」（『比較文化 福岡女学院大学大学院人文科学研究科紀要』創刊号 二〇〇四・三）。
- (14) 谷川健一前掲書（注5）一五九ページ。
- (15) 八幡信仰と朝鮮系金属生産集団との関わりは、中野幡能『八幡信仰史の研究』（吉川弘文館 昭和四二）第一章一節「原始八幡信仰の発生と移動」に詳しい。